毎日新聞 1988.4.11.

ヨーロッパの核と平和

ジャン・トゥーラ著

本書はフランス大統領ミッテランに訴える形で書かれた反核の書物である。核廃棄を主張していた社会主義政党が核抑止戦力を採用した道徳的矛盾をえぐり出し、フランスが核廃棄の原点へ戻ることを情熱的に語る。ヒロシマ、ナガサキの名を冠に書いてベツレヘムに平和巡礼する神父たちの高貴な姿などをくりかえし書きとめて、核大国の狂気をやさしくとがめる本書は、静かな感動を人々に伝えてくれる。戸口民也訳。

（三一書房・二、五〇〇円）

「ヒロシマ ナガサキ 通信」No 92（長崎の証言の会 1988.4.30.）

J・トゥーラ著、戸口民也訳 ●「ヨーロッパの核と平和」

著者はパリのカトリック司祭でジャーナリスト、作家でもある。

本書は米ソの核超大国のはざまで独自の核政策を追求するフランスの核抑止論を歴代の政治指導者や将軍たち自身の発言記録を引用しつつ、徹底的に批判している。

数年前、トゥーラ氏は広島と長崎を訪れ、私もインタビューを受けたが、あの柔和な面差しのどこにこのような強靱な批判の刃が隠されていたのかと思うほど、その舌鋒は鋭く、鮮烈である。

今日の核状況をもっぱら米ソを軸に眺めてきた人々には、英仏中の独自核のもつ矛盾、日本を含めた核安保や抑止神話の欺瞞が、新しい角度から見えてくるだろう。

さすがに司祭兼作家の面目躍如たる魅力的な核文明批判である。

訳者は長崎外国語短大教授。

（三一書房、二八二頁、二、五〇〇円）

カトリック新聞 1966.4.17.

「ヨーロッパの核と平和」

ジャン・トゥーラ著

原文の題は『あえて平和を』である。それは確かに、本書の内容を表す題であろう。

著者はフランス国内で有名な作家であり、神父である。彼は南太平洋のムルロア環礁で行われていた核実験を実力阻止するため、数人の仲間とともに実験の場まで行ったことがある。本書はミッテラン大統領あての公開質問状の形で、核の抑止力論のウソ、ごまかしを見事にあばく。

核抑止力論のウソあばく

「核兵器を絶対に使わない」と公式に発表したら相手の攻撃を押さえ込む力にならない。「攻撃されたら必ず核兵器を使う」と発表して初めて、敵を事前に押さえ込む可能性がある。しかし、人道主義、民主主義を唱える国、人間の尊厳を認める国が核兵器を使う覚悟をもつことは、神に対して、人類に対して、最大の犯罪を犯す覚悟をもつことになる。

本書のもう一つの特徴は、国の安全保障を図るために武力や暴力に頼るのではなく、別の方法で平和のために「戦う」ことを提言していることだ。過去のいくつかの事例や体験をもとに、「非暴力による民間防衛」という考え方を展開している。

たとえば住民全体が侵略に絶対に協力しないことを前もって公表したなら、侵略したかった国は考えるであろう。侵略者は住民の協力なしに、どうやって政治的支配、経済的搾取、イデオロギーの浸透を達成できようか。

すばらしい「平和憲法」をもっている日本国民は、どうやって有名無実にならないようにそれを守ればよいのか。また、日米安保条約が廃止されたら、どのように国の安全保障を図ればよいのか。

今までのような愚かなあやまちや犯罪をくり返したくない人、現実に沿う平和を築きたい人、「非武装による民間防衛」の具体的な方法をさがしたい人に、是非、本書の一読を切に勧めたい。

（エドワード・ブジョストフスキー＝ブラドの「司祭 団」〈三一書房 二五〇〇円〉）